桐野文良先生(美術学部・文化財保存学)が学生にすすめたい本

【書物との出会いを大切に】

私は保存科学研究室に所属しており、自然科学関連の論文はもとより古典技法書をはじめとして多くの書籍に触れる機会が多い。その一方で、社会に目を向けると近年の活字離れとともに理系離れも著しいと感じる。しかしながら、我々の生活はハイテク技術にとり囲まれており、それなくしては生活できないのもたしかである。是非皆さんにもそれらの身近な科学技術の一端を知って欲しいと思う。理系離れの原因の一つに“自然科学は難しい”という誤解があると思う。その誤解を解き、「科学をあなたのポケットに」をスローガンにわかり易く自然科学を解説したシリーズに講談社のブルーバックスがある。新書版で物理学、化学、数学、生物学、工学、医学、心理学など幅広い自然科学の先端分野を扱っているが、非常に読みやすく通学の電車などの中で気軽に読める。このシリーズは“わかりやすい”をモットーに書かれているので理科の好きな高校生や中学生にも読まれている。自然科学のさわりをつかむのに是非読んでいただきたい。自然科学をはじめ人文科学や社会科学まで幅広くテーマを取り上げているのが中公新書、講談社現代新書、講談社メチエシリーズ、岩波新書などであり、これも薦めたい。こういった“超”入門書を手始めに、学術書へと読み進んでいけば自然とその世界に入っていけると思います。最近手にしたものでは、自然のスケールの大きさを感じるものにNHK出版から出されているシリーズの『地球大進化』や、五木寛之著の『百寺巡礼』(講談社)なども心が落ち着く書として薦めたい。

最近はインターネットなどの高度情報化社会の進展が“活字離れ”を加速しているように感じられる。しかし、書物は文字から様々な世界を創造することができるので、文字と接することにより脳が刺激を受けるとともに、心の発達をも促すとも言われている。幅広い教養を持つことが豊かな心を育み、芸術性を高めていくと思う。若いときは多読、乱読もよく、それが良書と出会うきっかけにつながる。読書は心の肥やしとなるとともに、知識の幅を広げ、広い視野から物事を見られるなど一生の“こころの財産形成”になります。読む楽しさを味わってください。